

立教大学学術推進特別重点資金（立教 S F R）
大学院生研究
2006 年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院	21 世紀社会デザイン研究科	比較組織ネットワーク学専攻
指導教員	所属・職名		氏名
	21 世紀社会デザイン研究科委員長 教授		北 山 晴 一 印
自然・人文の別	人文	個人・共同の別	個人
研究課題名	わが国の中途身体障害者の自立と社会参加について －当事者の視点から見た障害者福祉－		
研究代表者	在籍研究科・専攻・学年		氏名
	21 世紀社会デザイン研究科 比較組織ネットワーク学専攻博士前期課程 2 年		鈴 木 隆 雄 印
研究組織	在籍研究科・専攻・学年		氏名
研究期間	2006	年度	
研究経費	200	千円	

研究の概要 (200～300 字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

本研究では、全国の 18 歳以上の在宅の身体障害者の中で 54%と最も多く、尚、過去 1 年間に一度、もしくは数回の外出という者が約 20% 近いという肢体不自由者についての考察である。また、さらにその中で、1 度、社会人として生活を送っていた人たちが、途中で身体に障害を負う場合、それまで、彼／彼女たちが築きあげたキャリアの喪失という点に着目して、途中で身体に障害を負い肢体不自由者となった者たちが、その後、いかにして生きているのか。何故、彼／彼女たちの再雇用や外出が困難であるのか。何故、自立や社会参加が困難であるのか、ということの研究の目的とする。

キーワード (研究内容をよく表しているものを 3 項目以内で記入。)

{ 中途身体障害者 } { 自立 } { 社会参加 }

研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

わが国の障害者福祉政策の変遷として、わが国の障害・障害者の定義を述べる。その上で、政策の歴史的背景を知るために、第二次世界大戦後から続いた措置制度、支援費制度の誕生の経緯、そして現在の障害者自立支援法に至るまでを記していく。

障害者自立支援法について述べる際、その大きな問題点として、利用量の1割の定率負担の重さについて、わが国の障害者の所得保障である公的年金制度の国民年金の定める障害基礎年金と厚生年金の定める障害厚生年金の具体的な金額を示すこととする。

その上で、将来的なベーシック・インカム (BI) の可能性として、アトキンスンの参加所得としての BI の構想を提示して、筆者は、BI の構想の参加所得によりつつ、ボランティアや地域活動への社会的な参加を要件して給付を行うというアイデアを概ね指示する。

その大きな理由として、第一に、子供、障害者、高齢者も、この参加所得に入れていることや現行の生活保護制度のようにミーンズテスト (資力調査) もないので、スティグマから解放されることを提示する。第二に、リスクマネジメントとしてのセーフティネットの機能によって、すべての人が生活上のリスクを生存権の保障と所得保障の両面からのサポートが可能となることをあげる。そして、第三に、ボランティアなどの参加という本研究科における 21 世紀社会デザイン学・コミュニティデザイン学分野において重要なサード・セクターの役割が重視されているからである。サード・セクター (非営利組織・ボランティア・NPO) の役割の重要性等、21 世紀社会デザイン研究を行う筆者としては、今後の研究につながる福祉社会システムへのビジョンを描くことができる。しかし、この BI の構想は、わが国の社会保障制度全体に関わる大きなビジョンであるがための限界も存在することを指摘する。

また、5 名の中途身体障害当事者たちの語り “narrative” から現状に迫りたいと思う。この作業により、中途身体障害者の抱えるリアルな課題や現状に迫りたいと思う。

本章のインタビューを通じて、「病い」のグループと「事故」のグループの差異を読み解くことが出来た。それは、第一に、「病い」のグループ A は、本人たちは「障害者」というよりも、むしろ「病める者」としての「患者」であるという意識があり、「病める者たち」のグループは障害者福祉サービスを利用していないことも明らかにした。

彼／彼女たちは障害者というよりも患者と自らを位置づけているので、障害者福祉サービスよりは医療機関への依存度が高くなる。「語り手」たちも福祉サービスよりも医療サービスのほうの必要性を語っている。

一方、「事故」グループ B は、事故後の入院とリハビリテーション以降は、医療機関とは離れ、障害者福祉サービスの利用者として日常生活を送っている。

第二に、障害者福祉サービスを利用していない「病い」のグループは、福祉サービスの利用の変わりに、家族サポート・介助等を、「病う」患者の家族メンバーによるアンペイドワークが行われているということである。しかし、このアンペイドワークは、従来の女性学 (フェミニズム・ジェンダー) が主張してきたアンペイドワークとは異なる結果を明らかにすることが出来た。

このアンペイドワークという問題と障害者福祉サービス市場のサービスの利用者としての参加 (参入) / 不参加という現状を初めて明らかに出来たのが、今回のインタビューの最大の成果であろう、と私は考える。

研究成果の概要 つづき

※ この(様式 2)に記入の成果の公表を見合わせる必要がある場合は、その理由及び差し控え期間等を記入した調書(A 4 縦型横書き 1 枚・自由様式)を添付すること。

研究発表 (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

立教大学大学院 2006年度 修士論文